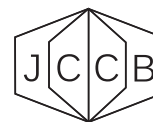


Journal for Children Crossing Borders

ジャーナル「移動する子どもたち」－ことばの教育を創発する－



2018 年 第 9 号 pp. 40-46

書評

モバイル・ライブズを生きる「移動する家族」の物語

岩城けい (2017) 『Masato』 集英社文庫

川上 郁雄*

© 2018. 移動する子どもフォーラム. <http://gsjal.jp/childforum/>

1. 「移動させられた子」の世界

この小説は、著者の岩城けい氏が文芸雑誌『すばる』の 2014 年 9 月号に発表した作品である。その翌年、集英社より単行本として刊行され、2017 年に文庫化された。また、この作品で、岩城氏は 2017 年に「第 32 回坪井譲治文学賞」を受賞している。

この作品の主人公、真人（まさと）は日本人の両親のもと、日本で生まれたが、小学校 6 年生になる前に、突然、親の会社の海外転勤により家族でオーストラリアへ移住することになった。まさに「移動させられた子」である。

この小説の特徴は、この「移動させられた子」、真人の視点で、物語が展開する点にある。したがって、物語の舞台は、真人の学校や友人、そして家族が中心になっている。物語は真人が現地校に入ってから 1 年半ほどの期間に起こった次の 10 のエピソードで綴られている。最初のエピソード、「新しい学校」から始まり、赤いポロシャツ／サッカークラブ／夏休み（ホリデー）／補習校／いちばん言っちゃいけない言葉／スクールコンサート／ワトソン・カレッジ／サムライ・ドッグ／卒業、と続く。

著者の岩城氏は、この作品を構想する上で、おそらく、自身の経験だけでなく、子どもを含む、多数の「移動する人々」の経験について相当の「取材」（リサーチ）を行なったと思われる。その上で、「移動する人々」に共通する、普遍的な経験の世界を見いだしたのだろう。そして、その経

* 早稲田大学大学院日本語教育研究科（E メール：kawakami@waseda.jp）

験の世界が現代を生きる人々にとって意味のある人間世界であり、私たちが考えなければならない「意味世界」であると感じ、それを「文学作品」として形づけたのではないだろうか。

ただし評者には、この作品が、文学鑑賞の作品というよりは、今の時代を読み解く貴重な研究書のように見えた。それは、なぜか。

私たちは、今、移動手段や情報通信ネットワークの発展した社会に暮らしている。人は日常的に移動し、通信端末を利用して遠隔地と簡単につながるバーチャルな生活空間に暮らし、多様なことばを駆使してコミュニケーションしている。このような現代社会を、社会学者のアンソニー・エリオットとジョン・アーリは「モバイル・ライブズ」(mobile lives)と呼ぶ(エリオット&アーリ, 2016)。その視点で見ると、この作品は現代社会に関する「学術的素材」が満載された貴重な文献として読めるのだ。その視点から、この作品を論じてみたい。

2. 「成長と自立」の物語か

この作品は文学賞を受賞するように、その文学的価値は誰もが認めるところである。例えば、本作品の文庫版の「解説」で、翻訳家・児童文学研究家・法政大学教授である金原瑞人氏は、この物語について、次のように解説している。その一部を、ここで引用してみよう。

主人公は真人。お父さんが海外赴任になり、家族四人でオーストラリアにやって来た。十二歳なので日本では小学六年生になるはずだが、五年生に転入。学校では、エイダンという少年としょっちゅうけんかをしているが、友達もできる。ピアノのうまいケルヴィン、肥満体型だが虫のことには異様に詳しいノア、サッカー仲間のジェイなど。オーストラリアにやってきて最初のうち、けんか相手にけがをさせて校長室に呼ばれてもろくに言い訳ができなかった真人も、やがてまわりの環境に慣れ親しむようになっていく。そして、サッカーチームのキャプテンに、夏のキャンプ合宿のことをきかされ、「もちろん、おまえも来るだろ?」といわれたとき、「ぼくは、ここに来てもいいんだ」と思い、「ぼくは、ここにいたい!」と強く思う。

(「解説」 pp. 232-233)

このときの真人のうれしさはそのまま読者に伝わってくる。真人の喜びがそのままストレートに胸に響いてくる。学校で言いたいこともいえず、けんかの言い訳もできず鬱屈していた真人が、ようやく belong できる場所を見つけたのだ。

ところが、ここから母親との葛藤が始まる。この展開を読んで、はっとしてしまった。英語圏に住んで、子どもを現地校に通わせている親にとって、子どもが英語を身につけて行くのがどうということなのか、じつは、この本を読むまで考えたことがなかったのだ。しかし、これはたしかに二言語の狭間で生きている家族にとってはとても現実的で大きな問題だ。

マサトはこう思う。「みんな、あんなに英語ができたらいって口ぐせみたいに言うのに、ぼくらが英語でしゃべると『日本語でしゃべりなさい』『日本人だろう』ってイライラした声で怒る」。十日間の夏合宿のあと、家に帰ってきたら、「日本語がぜんぜん出てこなくなってしまうって、お父さんに英語で話しかけて」笑われてしまう。

親のほうからするとこんな感じだ。

「英語が達者になったのはいいんだけど、今度は日本語があやしいのよ」(中略) マサトの母親はそれがいやでしょうがない。「あの子に英語でしゃべられると何言っているのかわかんないのよ。自分の子供なのに何言っているかわからないなんて!」(中略)

日本に帰るつもりで、現地にとけこむ必要を感じていない母親にとっては恐ろしい状況であることはまちがいない。その切実な気持ちは読者にもリアルに伝わってくる。一方、やっと現地になじんで足がかりができて、自立し始めた息子にとっては、非常にいらだたしい状況だ。(中略)

「土曜日もうサッカーしちゃいけないなんて言うからだ。お母さんなんか、大嫌いだ!」真人はこう思う。そのあと、アメリカ帰りで鬱屈したエイダンが母親にむかって、「I hate you! (母さんなんか、大嫌いだ!)」と叫ぶのを聞いて、こう思う。

「I hate you がエイダンを滅多ぎりにしてる。いちばん言っちゃいけない言葉だって、エイダンは自分でわかっていて言ってると思う。ほくもそうだから」

真人は大きな壁にぶつかって成長し、母親の気持ちを理解しつつ自立し、「もうひとりのぼく、英語のぼく」になる。そして、この「英語のぼく」がそのまま、この作品のタイトルになっている。(「解説」 pp. 234-236)

このように、英語圏のヤングアダルト小説の翻訳家でもある金原氏は、この作品の中心的なテーマが「成長と自立」であると解説する。評者はこの金原氏の「解説」を否定するものではない。確かに、この作品の中で、主人公の真人はたくましく成長している。しかし、評者が注目するのは、この作品に登場する「移動する人々」の生活世界である。この作品をひとりの少年の「成長と自立」の物語と総括するだけでは足りない気がするのである。その点を、さらに検討してみよう。

3. 移動とことば

この物語には、多様な「移動する人々」が登場する。例えば、この物語の第1ページは、クラスメイトの一人がクイーンズランドに引っ越す(移動する)出来事から始まる。著者はそのクラスメイトにジョシュア・ファーリーという名前までつけているが、そのジョシュアは物語の主要人物ではない。にも関わらず、この子どものディテールを書くのは、現代は「移動する人々」が

生きる時代であると読者に予感させる「しかけ」のように読める。主人公の真人とよく喧嘩をするクラスメイトのエイダンの父親はアメリカ人で、アメリカに住んでいる。エイダンはふだん母親とオーストラリアに暮らしているが、夏休みにアメリカの父親のところへ行き、近くのローカルな学校へ通ったこともあるという。アメリカなまりのあるエイダンはもともと勉強が苦手で、「リーディング・リカバリーのクラス」で、真人と一緒に、英語の特別指導を受けている。

もうひとりの友人でピアノが上手く成績優秀なケルヴィンは、family name がチョウという。両親が台湾人（タイワニーズ）で、彼は「いつも中国人（チャイニーズ）に間違えられる」という。「でもケルヴィンはオーストラリア生まれだから、チャイニーズでもタイワニーズでもないし、この顔だとオーストラリア人（オージー）にも見えない」と著者は説明する。

この物語には他にもたくさんの「移動する人々」が登場する。例えば、真人の父親の会社の日本人同僚の家でパーティをやる場面では、「田代さんのおくさんが今度はタイに異動が決まった」とか、「山崎さんのおくさん」は「うちなんか、ここ、十年よ。いつまでたっても帰れそうにない。子供はまるでこっちの人になっちゃってるし。」と言う。「津村さんのおくさん」は「うちは、異動続きでどれも中途半端になっちゃって。」と言ひ、子どもたちは「いまさら日本の学校にはぜったいついていけない。帰国がきまったら、帰国子女を受け入れてくれる私立かインターナショナルを探さないと。いままでいろんな国に行ったけど、そういえば、あの子たちの一番できる言葉って、一体どれかしら？ でも、他の言葉はともかく、英語さえ話せれば、今の時代、なんとかなるんじゃないかって主人は言うのよ。それで、今は、家でも英語を使わせてるの。」と言う。

真人が土曜日に通う補習校にも、多様な子どもたちがいる。「見かけも中身も半分日本人って子がほとんどのような気がする」と著者は説明する。例えば、礼央（レオ）は父親がオーストラリア人で母親が日本人だ。えみりは父親がニュージーランド人で母親が日本人。二人ともオーストラリアで生まれ、「ずっとこっちの学校だし、日本の学校へ行ったことがない。行くつもりもない。」そんな礼央とえみりは、「見た目、全然日本人に見えないから」、周りの人は二人が、「日本語がしゃべれるっていうだけで、スゴイ、えらいって思ってしまう。」それに対して、真人は「日本人なんだから日本語しゃべってあたりまえ」と見られてしまう。さらに、真人は「この1年ぜんぜん使わなかった」漢字を、みごとに忘れてしまい、悔しさを感じる。だから、真人は礼央とえみりの前で五年生の漢字の練習をするのは「屈辱だ」と感じる。その他にも、補習校の子どもたちのお弁当についての気持ちや宿題のことなど、著者は、細かく、そして丁寧にリアリティを描いていく。

著者の観察は、オーストラリアに住む多様な「移動する人々」にも及ぶ。例えば、転校生のターミナはいつもスカーフ（ヒジャブ）をつけて登校する女子だが、「英語がまだあんまりしゃべれない」。そのため、ターミナは真人と同じように英語の特別指導を受けている。真人はそんなターミナに「wash と job は dog と cough と同じ音になるって教えてあげる」。そのターミナは、ある日、「いじめ」にあう。スカーフの下には髪の毛がないんじゃないかと噂するクラスの男の子

たちの一人にスカーフを剥ぎ取られる。その勢いで、ターミナの足元に単語カードが散らばる。「run, sun, flood, touch ぜんぶ cup の u と同じ音になる」と真人が教えた単語のカードだった。真人は、ターミナと一緒にそのカードを拾う。「ありがとう」というターミナ、「ごめん」という真人。この出来事から生まれる子ども同士のやりとりや心の揺れの描写は見事である。

このように、この作品には子どもを含む多様な「移動する人々」が登場するのである。そして、その人々の生活で、ことばの問題は避けられない。ことばについての著者の観察力は鋭い。例えば、主人公の安藤真人は、「マサトゥ・アンドウ」や「マツト」と呼ばれる。ことばの問題は、親子のコミュニケーションにも影響する。前述の金原氏が述べた「母親との葛藤」はその例である。親子の苦しい関係の変化を指摘し、その変化の背景に英語と日本語によるコミュニケーションの問題、つまり、親子の英語能力の差による意思疎通の問題があると著者は指摘する。その親子の姿は、アメリカ帰りで鬱屈した友人のエイダンが母親にむかって、「I hate you!」と叫ぶ姿と重なる。

評者が注目するのは、このように「移動させられた子」の経験やその親子の葛藤が起こる現実である。それは、今や誰もが経験する「移動とことば」という課題に収斂する時代性でもある。今、世界は「移動の時代」を迎えている。

4. モバイル・ライヴズを生きる「移動する人々」

「移動する人々」の生活は、グローバル化とテクノロジーの発達により、複雑に変化してきている。それは、物語の途中に挿入される出来事や何気ない逸話にもよく表れている。

例えば、真人のお姉ちゃんは、オーストラリアの日本人学校に入り、日本の高校受験のために帰国し、その後、東京の高校（山岡女子学園）に入学する。そして、そのお姉ちゃんから突然、オーストラリアの家に電話がかかってくる。「阿佐ヶ谷のおじいちゃん」、つまり母親の父が倒れたという電話だった。その知らせを受けて、真人の母親が夜7時のフライトで日本へ帰国することになる。空港へ向かう車の中で、携帯が鳴り、祖父が亡くなったという知らせが入る。母親は「親の死に目にも会えないなんて!」と泣き、父親は「すまない」とつぶやく。翌日には、父親も真人も東京へ向かう。お葬式に参列したあと、父親と真人はすぐにオーストラリアへ戻る。携帯やインターネットというテクノロジーがあるために、地球のどこにいても家族の画像も声もつながる便利な生活の中で、悲しみも同時に起こることを示すエピソードである。

離れていても、すぐに顔を見て会話ができるのが現代生活である。それは便利であると同時に、残酷な面もある。真人の家族がオーストラリアへ移住したばかりの頃だった。東京にいる真人の友人の「翔太がスカイプしてきた。おまえってラッキーだよな、オーストラリアかあ、なあ、もう英語ペラペラになったんだろ? なんかしゃべってみろよ。ガイコクジンの友だちもいるんだろ? 金髪のさ。」といった会話が紹介されている。

補習校の真人の友人、礼央の母親は日本人だが、翌年の二月まで礼央を連れて日本に「帰る」という。真人は礼央とえみりと三人で肩を組んでポーズをしたところを真人の父親に携帯で写真を撮ってもらった。「あとで、それを写メしたら、「おまえも早く漢字覚えろよ。Leo」って返事が来て、お父さんがどこも似たようなことを言ってんだなと笑った」。これが今の時代のリアリティなのだと、著者が述べているように感じられる。

このような「モバイル・ライブズ」の中で一人ひとりの生き方が形付けられていく。母親が真人を連れて日本に帰国することを主張した時のことだ。父親がすごい剣幕でどなって立ち上がる。

「真人はこっちに置いていけ！」

「真人は連れて帰ります！」

ふたりとも怒りでぶるぶる震えている。

こんなふたり、もう見たくない。もう、たくさんだ！

「It's NOT your business. It's MY business! (お父さんとお母さんに関係ないだろ、これはぼくのことなんだ!)」

英語でどなってから、しまった、と思う。お母さんはぼくが家で英語を話すのを嫌がるからだ。来た頃は、英語がしゃべれるようになってほしいってあんなに言ってたのに。でも、もう止まらない。日本語で言えないことも英語だとスラスラ言える。最近、英語でないとかんじんなことが言えなくなっている。英語のほうがしゃべりやすくなっているというより、日本語だと、言いたいことがあっても、みんなから目立ちたがり屋とか、ヘンなやつ、って思われるのが怖いから言えない時がある。でも、英語だったら、「こいつ、こんなことを考えてたのか、すげえな」って友だちに感心されたり、自分の意見が言えてえらいって先生にもほめてもらえる可能性のほうがダンゼン高い。前は英語でしゃべってるときは、ウソついているみたいだって感じがしてたけど、今は英語のほうが正直に何でも言える。こっちが、本物のぼくなのかもしれない。それに、目立ちたがり屋（ショウオフ）、とか言うやつとはどうせ一緒に遊ばない。だから、日本語でいろいろ考えていても、今、ぼくの口からでるのは英語だ。もうひとりのぼく、英語のぼくだ。

これは、「移動とことば」がいかに「移動する人々」の生きるテーマになるか、そしてアイデンティティの構築に影響するかを示している。その意味で、この作品は、もう、真人という一人の少年の「成長と自立」の物語ではなく、「移動する家族」の物語といい。真人の姉と母親が東京へ戻り、父親と真人がオーストラリアに留まるエンディングは、「移動する家族」が「分散家族」(multi-sited family)に帰結することを暗示しているかのようだ。

以上のように、この作品は、単に、オーストラリアに移住した日本人少年の物語ではない。この作品に登場する人は、「移動する時代」という大波の中で悩み葛藤しながら生きようとしている人々、特に、大波に浮かぶ木の葉のように、不安定な複数言語環境で新たなことばを覚え、友だちと関係を結び、自分のアイデンティティと生き方を必死に探している子どもたちである。だから

からこそ、その人々の生き様は、読者の胸を打つ。その点において、この作品は、「モバイル・ライブズ」を生きる私たちの生活の根源的テーマが「移動とことば」であることを示した研究書であり、「移動する人々」の生のリアリティを提示した学術的意義のある書といえよう。

文献

エリオット, A. & アーリ, J. (2016). 『モバイル・ライブズ——「移動」が社会を変える』(遠藤英樹監訳) ミネルヴァ書房.